

ときには、辛口

2

まつもとみちすけ
松本道介



◆ 強さの秘密

萩原智子、倒れる

八月の終りに横浜国際プールへパンパシフィック大会を見に行った。前日の男子百米準決勝でわが中大の細川が五〇秒なかばの好タイムを出したので、その日の決勝レースでは、日本選手が初めて四九秒台に突入する歴史的瞬間に立ち会えるのではないかと期待したのである。

残念ながら決勝での細川のタイムは前日より少しおそかった。その日に活躍したのは女子八百で二位になった山田と、二百背泳の準決勝を一位で通過した萩原智子だった。萩原

はからだにも才能にもめぐまれ、背泳はむろんのこと自由形やメドレーでも日本記録をもつトップスイマーだが、この日はレースのあとにプールサイドで痙攣をおこしてたおれてしまった。すぐに担架で運ばれて行つたし、会場が広いので、気づいた人はあまり多くはなく、観客のあいだにざわめきがおこるようなこともなかった。

この数年かなり多くの水泳大会を見てきたものの、プールサイドで選手がたおれる場面を目にしたのは初めてである。萩原はいろいろな種目に出ているから疲労のせいかと思つたが、翌日の新聞を見ると過換気症候群だと

いう。これにはびつくりした。ショックを受けたと言つてもいい。

なぜかといえば、この種の心身症はスポーツ選手にはまったく無縁だと思つていたのである。というよりスポーツ選手には決して起きない心身症だと思つていたのである。

過換気症候群とストレス

過換気症候群という病名を初めて耳にしたのは三、四年前だったろうか。授業がはじまると間もなく一人の女子学生が教室を出て行き、外でうずくまっていたので、どうしたんだとたずねた。そのときに耳にしたのがこの病名である。どういう字を書くのか、なぜ起きるのかおおよそ見当もつかなくて学生相談室に聞きに行った覚えがある。小さい時から好きでもない勉強をしいられ、テストの点数のあがりさがりにおびえてきた若者がおちいる心身症だそうで、その後この病いをかかえる学生が少なからずいることを知った。

私はストレスからくる心身症のたぐいはすべてスポーツで予防できるし治りもすると思つてきた人間である。学生に相談を受ければ、馬鹿のひとつ覚えのごとくスポーツをや

9 連覇水泳部の「明るい緊張」

れとアドバイスし、自分自身も精神の疲労はすべてランニングやテニスで治してきたつもりなので、過換気症候群もスポーツで治ると思いこんでいた。そこへスポーツ選手の花形ともいべき萩原がこの心身症におちいったと聞いてショックを受けたのだった。萩原の場合かなりの重症で、何週間かあとの新聞でも入院はまだ続いており、今なお水を見るのがこわいと書かれていた。

萩原はなぜこんな病気になったのだろう。そんなことを考えるうちに私は水泳が孤独なスポーツであることを思った。むろんすべての個人競技は孤独といえば孤独だが、とりわけ水泳は顔が常に水しぶきの中にあり隣の泳者の顔を見ることがほとんどないから数多い個人競技のなかでもひととき孤独である。萩原がどのような練習をしているのか知らないが、山梨学院ではとびぬけた選手だから彼女一人のメニューで日々孤独な練習にあげくれているにちがいない。自由形、背泳、メドレーにわたって日本のトップに立つだけにそのことがプレッシャーとなりストレスともなっていたことは十分に想像できる。

そんな想像をめぐらしながら、もしも萩原が中大水泳部で練習していればこんな事態は起きなかつたのではないかと思われてきた。なぜなら、孤独とか心身症とかいった観点から見ると、中大水泳部の練習こそはそうしたものの克服に全力を注いでいるように見えるからである。

六年前から私は水泳部長をつとめている。ご存じの通り水泳部はこの九月に学生選手権九連覇をなしとげ、日大が持つ十連覇の記録に迫いつこうとしている。私は別に水泳が得意でもなく、ただのスポーツ好きにすぎないが、部長に就任した当時すでに三連覇していた水泳部がその後も六年勝ち続けた。まさに幸運な部長である。その幸運な部長として私はこの六年、中大水泳部がなぜ強いのかを常に考えてきた。よく言われるのは科学的トレーニングである。むろんそれが強さの原動力をなしてなしていることはたしかながら、このトレーニングに効果があるとすれば、他の大学だつてすぐに真似るにちがいない。

となると他大学に真似のできないものを探

さなければならぬ。もしそうしたものがあるとすれば、それこそは中大の強さの秘密になるが、今のところ私の出した結論は、水泳というスポーツの孤独さに打ち克つ努力であり、その結果として生まれた明るい雰囲気ということになる。それあればこそ選手たちはおそらく全国の大学で最もハードな練習にも耐えていけるのだと思う。

中大水泳部の明るさの源泉として私が注目しているのはプールサイドでのミーティングである。ミーティングには毎回二、三人の選手を指名して三、四分ずつ話をさせている。どんな目標をもって泳いでいるか、どのようにして泳力をたかめようとしているか、つらい練習にどうして耐えているか等々の話だが、三、四分となるとかなり考えて話さなければならぬし、水泳選手である自分を外から眺める視野も必要になり、それが或る種のユーモアを生むことさえあつて、実にレベルの高い人間教育の場となっている。水泳部というより高度の運動ゼミという感じがあり、このゼミの明るい緊張さえ持続できれば十連覇もまちがいないと私は思っている。

(文学部教授)